

訪 問 国：フィンランド

研修テーマ： P I S A型学力の育成～主体的な学びを育む授業づくりのあり方～

所属名 千葉市立美浜打瀬小学校

氏 名 渡 辺 佳代子

1 はじめに

平成 26 年 10 月 27 日～11 月 7 日の期間、「P I S A型学力の育成」について調査研修を行うため、フィンランドを訪問させていただいた。

フィンランドはO E C Dにおいて実施されているP I S A調査で常に上位に位置している。

P I S A型学力とは、「知識や経験をもとに、実生活の様々な場面で直面する課題を積極的に考え、解決するためにどう活用していくか。」という能力である。フィンランドでは、「子供たちに身に付けさせたい資質や能力」を明らかにし、子どもたちが主体的に学ぶ「プロジェクト型の学習」「協同学習」など学習方法を工夫することでP I S A型学力を育成しており、実際に現地校で具体的な調査をしていきたい。

2 フィンランドの教育状況

(1) 学校の独自性・教師への信頼

フィンランドでは、国家教育委員会が作成している「コアカリキュラム」を受け、地域の実態やニーズに合わせて、各学校が独自性を発揮して教育を行っていた。また、それを具現化するためのカリキュラムを作成するのは教師一人一人である。現場の教師への絶対的な「信頼」をもとに教育が展開されている。

(2) 平等な教育環境

「よりよい教育を行うことは、最終的に国家全体の利益になる」との考えのもと、フィンランドではどの子に対しても、平等に教育を受ける機会を提供し、個を大切にしたい教育を行っていた。発達や成長に見合った学習の進み方をすることは当然であるとしている。就学開始時のレディネスをもたない場合、入学を 1 年遅らせるための「準備教室（0 年生）」が設置されていたり、中学校卒業時に学力が不十分な場合には、もう一年勉強することができる「10 年生」というプログラムが設置されたりしている。

3 学校訪問をして

(1) クオッパヌンミ小中一貫校

フィンランドでは特別支援教育を、「遅れる前に指導する」「能力の高い子供をさらに伸ばす」という、学習支援も含めた広義な意味で捉えている。ヘルシンキ市に位置するクオッパヌンミ小中一貫校には、通常クラスとはほぼ同数の特別支援学級があり、一人一人の子供のニーズに合った教育を行っていた。

学習困難な子供が所属する特別支援学級では、子供は自分で一週間の予定を立て、どの教科の学習をどの順で行うのか計画し、学習を進めていた。今学んでいることが自分の将来にとって必要であり、実社会と関連づいていることを感じさせながら、学び方を学ぶ教育（learning to learn）」が展開されていた。

通常学級の授業では、「ペア学習」「グループ学習」といった少人数で学ぶ協同学習が展開されていた。中学 2 年生の国語の授業では、新聞記事を教材とし、3～4 人のグループで討論をしながら次の課題を解決していた。

- 1 好きな記事を見つけ、自分で見出しをつけてみましょう。
- 2 その記事は、「誰が・いつ・何をした」記事ですか？
- 3 スポーツ欄から、自分の好きな選手を選びましょう。その理由は何ですか？
- 4 スポーツ欄から自分の好きな写真を選びましょう。その写真から何が読み取れますか？
- 5 スポーツを通して、自分自身を豊かにするに

【グループで取り組む課題】

数多くの新聞記事の中から自分にとって必要な情報を選んだり、選んだ根拠を論理的に友達に伝えたりすることで、情報を精査する力が育つと共に、P I S A型読解力につながる、「批判的思考力」も育成されると感じた。子供たちは、自分の意見を押し通すのではなく、相手の意見を客観的に受

け止め、対話を通して問題を解決していく姿が印象的であった。

また、課題の5のように、記事を単に読むだけでなく、自分の将来に結びつけて考えたり、社会とのつながりを考えたりすることで、知識・技能を活用する力も身につけていくことがわかった。



【少人数グループでの協同学習】

（２）スオメンリンナ小学校

世界遺産スオメンリンナ島にある、児童数 60 名程度の小さな学校であるスオメンリンナ小学校では、1 年と 5 年、2 年と 6 年という複式学級で授業を行っていた。自由なスタイルで、自主的に学ぶ姿が見られた。



【バスストップ学習】

2 年生の授業では、「バスストップ学習」を行っていた。これは、さいころの目をふり、出た目に応じた内容を行うという学習である。「お話づくり」「クリスマスツリーづくり」「かけ算」など、教科の枠を越え、多様な学習活動となっている。身近な生活にかかわる内容も含まれており、学んだこ

とを応用したり、活用したりする学習であった。

「かけ算」の学習では、鏡を使って数を 2 倍にして考えるなど、具体物を用い、実感を伴った理解ができるような工夫がされ、集中力を持続して学習できていた。

4 研修成果の活用

フィンランドでは、学校独自で教育課程を工夫しながら、子供が主体的に学ぶ、「協同学習」「問題解決的な学習」等、内容や方法を工夫して、PISA 型学力を育んでいた。本市の教育でも、今後一層求められる「21 世紀型学力」育成のためにも、フィンランドで学んだことを次のように活用していきたいと考える。

（１）一人一人の学びが充実する環境づくり

全ての子供が平等かつ主体的に学べる環境を作っていく必要がある。じっくりと課題解決学習が行えるための時間の保障、一人一人のニーズに応えるための支援の保障をしていきたい。また、図書館等、外部施設との連携を図ることで実社会と関連させながら学べるようにしていきたい。

（２）日々の授業改善

①知識・技能の活用につなげる学習内容の工夫

身近な課題を解決する場面を設けたり、教科横断的な学びを展開したりすることで、知識・技能を活用する内容となるよう工夫する。

②協同学習の実施

「ペア学習」「グループ学習」という少人数で学ぶ学習形態を取り入れ、グループでの討論、議論を通して、考えることを重視することで、思考力、判断力、表現力を育てる。

③学習の順序、内容の選択

課題解決に向けて、内容や順序を一人一人の子供が選択し、学び方を学ぶ機会を設けると共に、経験や知識を活用しながら解決する力を身に付けさせていく。

④情報活用能力の育成

必要な情報を精査し、効果的に活用する力を身に付けさせる。また、資料をもとに意見を論じたり、相手と話し合ったりする力も育てる。

訪 問 国：ドイツ

研修テーマ：PISA型学力の育成

所属名 千葉市立おゆみ野南小学校

氏 名 木 村 健 治

1 はじめに

平成 26 年 10 月 13 日（月）から 10 月 24（金）までの 12 日間、千葉市教員等海外派遣研修事業（独立行政法人教員研修センター教育課程研修指導者海外派遣プログラム）の研修生としてドイツ連邦共和国を視察させていただいた。

研修テーマは「PISA 型学力の育成」に関しては「フィンランド」の教育が話題によくあがる。そのような中「ドイツ」の教育事情を視察する意義は次の通りである。

ドイツは第 1 回の PISA の成績が非常に悪く、日本より大きなショックに見舞われた。その後、第 2 回、第 3 回と確実に順位を上げている。

この事実を踏まえ「ドイツが着実に PISA の順位をあげている理由」を教育政策や現場での指導から見出したい。

2 ドイツの教育事情（教育制度等）

ドイツの教育はレベルが高い。このことは、ドイツ人をはじめ、多くの者の考えだった。しかし、2000 年 PISA 不振によりそれが幻想であることが明らかになった。このことはドイツ人にとって大きなショックであり、国レベルで学校教育改革を行うきっかけとなった。

その改革は数多くある。その中でも、大きなものは次のようなものがある。

（1）教育スタンダードの導入

ドイツは 16 の州から成り立つ連邦国家である。そして、日本の文部科学大臣にあたる大臣も各州に存在する。このため、2000 年 PISA 調査までは、それぞれの教育が実施されるという状況であった。

そこで、ドイツは各州の文部科学大臣が参加する会議（KMK）を実施し、教育の水準を示す「教育スタンダード」を導入した。あわせて、各州に 8 年生と 10 年生で実施し、「教育スタンダード」がその基準とされた。

（2）各州による教育制度の改革

これまでのドイツは次のような教育制度をとっていた。それは、ドイツの教育は 10 歳から分化し、

- ・13 年生でアビトゥワを受験して合格すれば大学進学が可能（ギムナジウム）
- ・大学進学よりも専門学校（リアルシューレ）
- ・通常この学校に進学すると大学進学は不可能となる。（ハウプトシューレ）

この制度下では教育格差が極めて大きく、ギムナジウムへの進学には、親の社会的・経済的地位が大きく影響していた。ドイツで大学進学するには「アビトゥワ」とよばれる卒業試験をパスする必要がある。そして、その成績順に自分の希望する大学・学部に入学できるという制度になっている。そのため、よりよい点数をとることが希望の大学・学部に入ることへつながるのである

したがって、旧制度で「ハウプトシューレ」に入学した生徒や「ギムナジウム」や「リアルシューレ」の学習についていけなかった児童・生徒は進学の道が閉ざされてしまっていた。

そこで、ベルリンは他州に先駆け、ハウプトシューレを廃止し、リアルシューレと統合させた「ゲザムトシューレ」を設立した。また、ミュンヘンでは、「ギムナジウム」「リアルシューレ」「ハウプトシューレ」の 3 校を一定の条件を満たせば移籍できるという改革も行われた。

このように、2000 年 PISA ショック以降、各州は 10 歳で進路を決め、その変更が厳しかった教育制度の柔軟化を図っている。

（3）移民者への言葉の能力向上の取組

ドイツの教育改革は前述のとおり、州によって若干の違いがある。しかし、教育改革においてどの州も共通して取り組んでいたことは、「言葉（ドイツ語）の能力」の向上であった。

特に移民者への言葉の能力向上には各州、各学校それぞれの方法で手立てを講じていた。

3 学校訪問をして

(1) Mittelschule an der Alfonsstrabe

〈移民児童への言語指導〉

ドイツ語ができない児童・生徒の言語力をどのようにのばしているか。この点は「言語活動の充実」を掲げている日本にも参考になる。

移民してきた児童・生徒は保護者もドイツ語を話せない場合が多い。そこで、この学校は保護者へもドイツ語の講座を準備し、親子で言語能力の習得ができるようにしていた。また、これまで午前のための教育課程を午後まで実施できるように変えていた。校長先生の説明では、「学校にいれば、ドイツ語に触れる機会が多くなりその習得も図れる」ということであった。また、ドイツ語を週の30パーセントに及ぶ時間を割り指導にあたっていた。

この教育を6年間継続することにより、ドイツ語を全く喋れなかった児童・生徒が「アビトゥワ」で優秀な成績をとることができるようになったという成果をあげた。



【教育スタンダードの具現化】

16州によって作られた教育スタンダードが現場でどのように具現化されているのか。このことも興味深い点であった。

様々な学校で質問をした結果、教育スタンダードの具現化は各教師に任されている部分が多いことがわかった。しかし、教師たちが作成するプリントは、単に計算問題や文字の練習にとどまらず、児童や生徒が既習の知識や体験をもとに課題を解

決していけるものとなっていた。またそのプリントは1単元に数種類用意され児童が実態にあったものを選ぶようになっていた。このプリントをもとに、児童は教室に設置されている図鑑等や教科書を用い、調べ学習を進めていた。このような学習形態は日本の総合的な学習に似ていたが、私が視察した学校では、大きく違う点が2つあった。

それは、作成されたプリントには課題とその課題を解決する見通しをできるだけ詳しく書く欄があったこと。2つ目は課題解決の時間よりも見通しをもたせる時間を大切に、教師が熱心に指導していたということであった。

【児童が見通しをもつまで熱心に指導する教師】



4 研修成果の活用

視察した学校ではPISA型学力の育成のために、課題解決の見通しを論理的に書かせる工夫をしたプリントを多く準備していた。また、そのプリントを用い、解決する過程よりもその見通しが論理的に書かれ、読む人、聞く人にわかりやすくなるように改善させることに時間をさき、熱心に指導をしていた。このことは、自分では「当然だ。」と思っていたにもかかわらず、実践をしていなかったことに気づいた。

課題をもたせ、その解決をしていく学習形態は日本でも多く行われている。しかし、その見通しをしっかりと考えさせ、かつ分かりやすくできるようになるまで熱心に指導する点が、今後の課題であると感じた。

そこで、今後は「いかに課題を解決するか」を重視した授業構成・単元構成を工夫していきたい。